世界的評価を受ける貝原益軒

ドバリー, W・T
コロンビア大学名誉教授

<https://doi.org/10.15017/18147>

出版情報：中国哲学論集. 20, pp.62-74, 1994-10-10. 九州大学中国哲学研究会
バージョン：
権利関係：

世界的評価を受ける貝原益軒

ウイリアム・セオドア・ドバリー

【解説】 本稿は、一九九四年四月八日（金）から三日間、福岡市において開かれた「東アジアの伝統文化国際会議」初日の「シンポジウム・貝原益軒を考える」（同実行委員会主催、福岡市・西日本新聞社共催）の基調講演の記録である。基調講演の講師ウイリアム・セオドア・ドバリー氏（Wm. Theodor de Bary）は、一九一九年生まれで、アメリカ・コロンビア大学名誉教授である。氏は、中国近世思想史・徳川時代の思想史・朝鮮実学思想史の研究者で、『インドの伝統思想』『中国の伝統思想』『日本の伝統思想』の三部作など多くの著作がある。邦訳には、『朱子学と自由の伝統』（山口久和訳、「平凡社選書」一〇七、一九八七年刊）がある。

この基調講演は一般市民にも公開され、逐次通訳を棕本由起子氏が担当された。ドバリー、棕本両氏のご快諾を得て、テープ録音を基にここに収録するものである。両氏に感謝申し上げたい。なお、「国際会議」の内容については、本誌所載の「学界消息」を参照頂きたい。

—

岡田先生、ご親切なご紹介、まことにありがとうございます。本日、このような席にお招きいただきまして、巨人たる儒学者・貝原益軒についてお話しできますことを、大変光栄に存じます。私の古くからの友人である岡田先生

を初めといたしまして、研究者の皆様方、福岡市民の皆様方の前でこういったお話しができますことを、大変うれしく思います。

「私は、思い起こせば、約五十年ほど前に初めて福岡に参りました。それは一九四五年（昭和二〇年）の九月でしたけれども、街に入ってみましたら、街中が全く破壊し尽くされていました。その時のことは今でも目に浮かびます。しかしそれ以後、日本は奇跡的な復興を遂げましたが、これは歴史上の例外的な事実であるかのように受け止められています。」

しかし当時の日本、一九四〇年代後半から五〇年代にかけての日本の状況がどうであったかを今だに思い起こすことができない私、そして他の方々にとってみれば、それと同時に、その当時の日本は敗戦という事実を受け止めていたわけですが、それ以前の伝統的な日本の考え方に敗戦の原因があったとよく言われていたという事実は、忘れることができません。つまり、過去の日本の文化が否定的に捉えられていたわけですが、その中でも特に儒教が、一九三〇年代から一九四〇年代にかけての日本のあの破滅的な冒険主義の中心的な要因になったということがよく言われていました。

戦後の西洋における日本研究の主要なテーマは、日本における近代化の問題でした。そしてこういった場合、大部分のアプローチというのは、西洋を近代化の基準と考えるものでした。アジア諸国、いわゆる第三世界では、どのくらい進歩しているか、あるいは進歩していないか、ということの判断基準を西洋に置いたわけです。言い換えますと、「近代化」イコール「西洋化」と捉えられていました。そしてさらに、西洋化のあるいは近代化の基準というのは、一般的に言う経済的発展でした。ですから、いかにその社会が工業化しているか、技術的発展が遂げられているか、こういったことが物差しとなって見られたわけです。こういった見方の中で、西洋と同じようなやり方でこの発展に寄与する、あるいは発展を支えるようなものではない限り、この近代化を阻害するもの、近代化に逆行するものと考えられていました。特に儒教の場合ですが、資本主義経済下における自由企業制とか、あるいは非常に強い個人主義とか、あるいは全ての外的抑圧からの個人の解放とか、こういったものに反対するようなものとして捉えられていたもので、その当時理解されていたいわゆる「近代化」については、この儒教は障害となっているとみなされていたの

です。

こういった見方が変わってきましたのは、まず日本、それに次いでその他の東アジア諸国が、西洋に追いつく能力を持つていたことを見せ始めた時期であります。非常に急速な経済発展を遂げましたし、技術開発も進みました。分野によっては西洋を追い抜く面も出てきました。そうなってきましたと、学者あるいは他の専門家の方たちが、この驚くべき成功の原因のもとに隠れているのは一体何だろうか、成功の原因は何だろうかということを考えるようになってきました。当然のことながら、物理的要因というものはその原因ではないとされました。つまり、日本・韓国・台湾においては天然資源は不足しておりましたので、そこで結論として、これは人的要因が成功の理由であろうということになったわけです。その中でも特に文化的要因が重要であるという結論になってきました。

このように見方が変わってきましたと、その中で儒教も再評価を受けることになりました。東アジア諸国の人々の中に儒教的な考え方の影響が残っていて、それが労働倫理に影響しているという考え方です。つまり東アジア諸国の人達は、勤勉であり、集団の規律を重んじ、高い向上心を持っているというふうにみなされるようになったのです。時には、このような学ぼうという強い熱意を持っていること、そして教育に非常に高い価値を置いていることが、すなわちこういった勤勉さやあるいは技術的な優秀さを発揮する源であると理由づけられるようになってきました。

そして最も皮肉なケースですけれども、こういった見方の変化の例として、中華人民共和国のことが挙げられると思います。もともと中国は反資本主義・反儒教国として建国されましたが、いまやこれが逆の方向に動いています。つまり、資本主義のみならず、東アジア諸国共通の伝統文化として、儒教的な倫理も肯定し奨励する方向に中国の指導者は動いています。ですから中国の中でも、社会主義的近代化を図るうえで儒教の再評価が行われてきました。かつては儒教は反動的であり、反革命的であると考えられてきたわけですが、現在では近代化を促進する要因として承認されつつあります。

私自身驚くことですが、こういうふうに見方が変わってきているとはいえず、いまだに変わっていない面もあります。それは、この儒教を表面的に見る見方、そしてまた近代化のはかなさと言いますか、近代化そのものの短命さというものを表面的に見る見方です。儒教あるいは近代化というような考え方を研究し分析する上で、それらを何ら

かの意味あるカテゴリーとして捉えようとする姿勢が余りありません。ですから、儒教を近代化と絡めて考える上でも、その儒教の教えそのものの深い研究は余りされていませんし、歴史的に形式發展がどのようになされてきたか、そういうことを考えたうえで、それを研究するという傾向もありません。またさらに驚くべきことですけれども、こういった儒教と近代化という問題を捉える上で常に前提とされているのは、儒教が近代化の役に立つのか、あるいは近代化を妨害するものなのか、というような考え方なのです。ですから、たとえばその近代化というのが資本主義によるものであらうと、あるいは社会主義によるものであらうと、儒教的な視点から近代化そのものが批判され得るといふような、そのようなことを考える方が非常に少ないのです。さらにその上、たとえ儒教に肯定的な評価を与えたとしても、それ以前の儒教に対しては、無分別で思慮のない、急ぎ過ぎた近代化の形の一要因としてしまった、というような新たな論議が起るかも知れませんが、こういうふうな視点から研究を進める方も、また非常に少ないのです。

ですから、こういうふうな状況にありますので、私自身が深く信ずるところですが、私どもが貝原益軒の思想、あるいは業績をよりよく理解することは、こういったことの研究・分析の助けになるのです。つまり、以前にあったように文化にとらわれたものの見方をする、あるいは大して吟味・検討も加えないまま特定の前提を用いて研究をすること、こういうことは少なくなってくるのではないかと思います。これが儒教の研究であらうが、近代化の研究であらうが、そういった問題に対するアプローチを、貝原益軒の研究を通じて私どもは達成できるのではないかと、私は思うわけです。

二

西洋諸国における最近の強い傾向としまして、儒教を集団倫理、つまり社会倫理と同一のものとなす考え方があります。つまり、儒教においては個人というものは常に家とか国家というような集団に從属するものであると理解されているわけです。たとえば、東アジア諸国において自由意志論者の解放運動が行われる場合、一例として中国の五・

四運動というようなものがありますけれども、このような場合でさえ、儒教というものは非常に権威主義的なもので、個人を抑圧するものとみなされてきました。また同時にしばしば儒教が受ける批判は、近代科学に対して敵対的・対立的なものであるというものであります。ですから、こういった考え方が進んできますと、近代科学あるいは個人主義を成功させるためには、儒教式の教育というものは完全に捨て去るべきだという、そういった行き過ぎた考え方が出てきます。

よく知られていることですが、貝原益軒は真の儒者でありました。特に徹底した新儒教 (Neo-Confucianism) の信奉者でありました。そして、様々な分野で大きな貢献をなした人物であります。本草学・動物学・地理学・農学・言語学・栄養学・衛生学・薬学、その他、様々な分野で大きな仕事をしております。別の言い方をしますと、貝原益軒の新儒教の解釈、その用語で「格物」という言葉を使いますけれども、こういった考え方が、益軒自身に対して、積極的に蘭学に関心を寄せることや、あるいは様々な分野において実証的・経験的な研究を続けることを促したと言えます。

さらに、貝原益軒は自然と人間との間の相互関係、天地人一体の全体的な視点、世界観を持っていました。これがあつたが故に、むしろ誠実に真剣に、自然科学の研究が追及できたのだと言えらると思えます。ですから、自然を単なる研究対象、あるいはある部分に限って分析・探求の対象とみなすような時があつたとしても、だからといって、自然全体、あるいは天地人一体の考え方が損なわれるということはありませんでした。こういう意味において、儒教、特に新儒教に言えることですが、自然科学的な探求をするからといって、自然に絶対的な価値を置く、自然を崇拜するという精神が失われるということは決してありませんでした。

こういったバランスの取れた見方を、貝原益軒は持っていたわけですが、これは貝原益軒の生涯にわたる業績に現れております。まず貝原益軒自身、全体的な知育・徳育というものを重んじていましたけれども、これは新儒教、つまり朱子学から生まれ出た考え方でありました。それから、自然科学へ大きな関心を寄せておりましたけれども、これは新儒教と決して矛盾するものではない、一貫した考え方でありました。そして、真に教育を施すということ、人々に朱子学、儒学の教えを施すということを生涯にわたる理想として、これを常に追及してまいりました。つまり

益軒というのは、朱子学そのものについて、ある種の理論的定式化について疑問があったとしても、その教えの理想とするところは常に守って信奉していった方であったわけでは。

貝原益軒自身がどういうふうなやり方で新儒教を学んでいったかということですが、まず最初の時期にその注意を払ったのが『四書』でした。『四書』の講読でありました。その後、これを講義することになりました。しかし、こういった貝原益軒が用いた全ての書籍というものはいわば教育的な書物でして、全てが学びの課程に投ずるものであったのです。まず最初に朱熹の『四書集註』——『大学章句』『中庸章句』『論語集註』『孟子集註』の講読から始めましたけれども、これは決して驚くには当たりません。なぜなら益軒の時代では、『四書』というのは基本的に朱子学の入門書とみなされていたからです。むしろ驚くべきことは、朱熹はこの『四書集註』を編纂するという事に生涯を費やしたわけですけれども、朱熹の業績の最高峰と言えるようなものが、貝原益軒においては最も重要な目的であるとはつきりみなされ充足されていたことでもあります。つまりそれはどういふことかと言いますと、教育課程、人に教えを与える場合の最重要項目というものを提供するという目的でありまして、これは結果的に、後々、東アジア諸国に全て受けいられるようになりました。

その後、益軒は『小学』の講読を始めました。これはまるで高校レベルから幼稚園レベルの書物まで戻ってしまうような印象を与えるかもしれませんが、『小学』を読むということの重要性は、決して入門者にとって必要であったから大事だったというわけではありません。確かに、こういった古典の文献といえますと、非常に言葉が難しいわけでありますので、入門者・初心者には大変な面がありますけれども、むしろ『小学』の重要なところは、それが非常に完全な教育哲学を提示しているという点にあります。つまり、一人の人間が生まれてから老いるまでに、いかに自己を統合していくかという哲学を提示しているわけです。もちろん、益軒がこういった『小学』を学んだということとは、特別なことではございません。十六歳で始めましたけれども、その当時の教養ある人々にとつては、『小学』を読むという事は当然のことで、これは基本的な書物とされてきました。しかしやはり驚くべき点は、この『小学』を通じて、益軒がいかにシステマティックで、十分に行き届いた自己の涵養というものを目指していたか、知育・徳育を図っていたかということです。つまり、一人の人間として、自己の内面的充足感・充実感に基づいて、自分以外

の人間や周りの世界との秩序だった関係を求めようとしたということです。これが『小学』の講読の中に生かされてきたということだと思います。

次に益軒が集中的に学んだのは、朱熹の編集した『近思錄』でした。これは『小学』と多くの面で同じ構造を持っておりませけれども、より高い哲学を提示したものです。朱熹の他の多くの書物と同じように、『大学』と基本的に構造が同じですが、ただ違いますのは、朱熹がその序文で書いておりますように、粗野な田舎の子供にとつても解りやすいガイドとなるように書かれているということです。つまり、この書物以外には何らの手引きもない子供にも解るように書かれています。

それから問もなくして、貝原益軒はこれらの書物を、まず郷里で、それから京都で、そして江戸で講義するようになります。その後には、この三か所で順番に別々の時期に講義をするようになりますけれども、数少ない例外もあります。この講義のテーマと言いますのは、儒教の基本的な書物、そして新儒家の書物というものを代わる代わる取り上げるといふものでした。その例として、真徳秀の書きました『心経』があります。これは明らかに朱熹の『中庸』の解釈を発展させたものですし、それからこの真徳秀の『大学衍義』がありますが、これもまた朱熹の『大学』を、人の上に立って政治を行う人のために発展させたものでした。それからさらに、朱熹の「白鹿洞書院揭示」の講義に移りましたが、このように様々な書物を用いたとしても、基本的には『四書』から離れることは余りありませんでした。

そして貝原益軒は、さらに様々な分野にその関心の領域を広げていきました。地理学・地誌学・郷土史・文化史・植物学・農学などへと、その興味の対象は分化していきましたけれども、しかしその最晩年に至っては、やはり一番の中心に据えたのは朱子学の書物でした。それは益軒自身の著作にもはっきりと現れております。特に、七十八歳の時に著しました『大和俗訓』、八十一歳の時の『五常訓』、同じく『家道訓』にはそれがはっきりと現れております。

このように朱子学の基本的な文献に焦点を当てて、益軒が研究を続けたということは、決して異とすべきことではありません。しかし、もしそれが中心に据えられていなかったならば、あれほど多様な貝原益軒の学問的な関心というものは、むしろ分散する傾向に向かったと考えられます。それから、歴史的な視点から見ましても非常に意義深い

のは、貝原益軒が朱子学のこの基本科目を非常にスタンダードな教養科目と捉えていたことです。これは十九世紀を通じて東アジアに非常に長期にわたって普及した教育科目でした。これは広く受け入れられたわけですが、おもに学者・教師といった個人ベースで受け入れられていきました。各国、多様な政治状況がありましたし、様々な社会的な体制がありました。しかしながら、東アジア諸国においては、前近代における教育制度というのは、こういった個人の学者・教師の行動によって培われていったわけでありまして、決して国が強制したイデオロギー、国家による制度の中に普及したわけではありません。

以前からはつきり認められていることですが、貝原益軒の特に大きな貢献というのは、この新儒教を彼の著作を通じて、人々が日常使う言葉で書き表すことによって、日本文化の中に広めていったということですが。

三

先ほど私が申し上げました朱熹の基本的な書物は、中国語の口語で書かれているわけではありません。朱熹は比較的簡明で一般の人にも分かりやすいような表現を心掛けておりました。さらに、教育水準の低い人々、教育を受ける機会のない人々にとっても解りやすいように図っていたはずですが、だからこそ、その教育制度の中でこれが基本的な教科書として用いられる利点があったわけですが、それが最下層の貧しい村の人々にとっても手に届くものであるようにという心くばりがあったわけですが、しかしながら、中国教育史上の最大の皮肉であるかもしれないかもしれませんが、朱熹がさまざまな方法を用いて教育の普及という最大の目的を果たそうとしたにもかかわらず、こういった言葉というものが、同時にその教育を普及するという目的の妨げになった面もあることは否めません。

中国における新儒教主義の教育の歴史がどうであったかという点について、これ以上立ち入ってお話するのは避けようと思います。これについては、私はいくつかの本で書き著しております。しかし少し簡単にまとめて申し上げますと、その朱子学の教育の目的というのは、次のような点があったと思います。

まず第一点として、朱熹は教育とは全てのレベルの人々に必要なものだと考えました。支配者から一般市民にいた

るまで、様々なジャンル・形式で行うべきだと考えておりました。

それから第二点として、朱熹は『大学章句』の序文にも書いておりますけれども、普遍的な学校制度・教育制度というものを訴えました。『大学』の方法に基づいた制度ですけれども、それは中国の聖賢が打ち立てたモデルを基にしたものでした。全ての人々のための教育、首都から村々に至るまで学校を作ること、それが朱熹の目的でした。特に注目すべきなのは、貝原益軒がこの朱熹が書いた序文に非常な関心を寄せまして、二十七歳の時に特別にこの序文についてだけ講義を行ったということです。

その朱熹の時代には、このような学校制度・教育制度というものはありませんでした。朱熹は当時、地方長官でしたので、自分の考えたのとは別の方法・ジャンルを使ってコミュニケーションを図り、一般庶民向けの教育を図ろうとしました。それには自発的な地元の組織に基づいた「郷約」の制度を用いようとしてましたし、それから非常に簡単な言葉で倫理的な処世訓を書いて、それを庶民に提示しようとしてました。

モンゴルの元朝の支配者でありましたフビライは、その当時の中国人の学者許衡が勧めるところの普遍的な教育制度、一般庶民のための教育制度という考え方に同意しました。しかしながら次の治世になりますと、これが変質をしていきまして、むしろ「科擧」というような官吏の登用試験に使われるようになりました。ですから、その当時の政府の中でも礼部と呼ばれる、いわば式典を司る部門のところでも取り扱われる官吏登用試験というような非常に制限された目的のために用いられるようになりまして、一般庶民のための教育というふうにはなりませんでした。

中国におけるこういった教育制度がどのような問題を持っていたのか、どう変化したのかを、今日お話しする時間にはあまりありませんけれども、先ほど述べましたような発展の結果として次のようなことが起きてきました。まず、こういったもともとの教育制度の発想があったわけですから、これが一般庶民への指導というふうに変わっていきまして、いわば地方の役人が日常的な役割として一般庶民を指導するというふうになっていきました。つまり、非常に学識も文化水準も低いレベルの人々を取り扱うようになっていったわけです。ですから、ある意味ではそれとは全く別の公式の学校制度、非常にエリートで古典的な書籍を取り扱うような文人文化のもの、つまり、官吏の登用に非常に密接な結び付きを持った教育制度とは別なものとして発展する結果になったわけです。

貝原益軒の成した大きな貢献について非常に重要な点を評価する前に、東アジアにおける教育について、書き言葉ではなく話し言葉を用いたことが非常に重要であるということは、簡単にでもお話しすべきだと思います。口語を用いたというのは、決して益軒だけが独自に用いた発想ではございません。中国において、明代そして清代には、「郷約」という村々での講義には口語が用いられましたし、また大衆芸術の形式も使われておりました。明代の政治家で張居正という人がおりますけれども、この人は十六世紀になりまして識字率がだんだん高くなってきますと、一般人向けの指導書としてこの『四書』を口語で書き直しています。

また、韓国の方で有名な世宗（在位一四一八～五〇）ですけれども、この人も新儒教教育というものを奉じておりましたので、君命によって口語の『四書』、そして音声表記（ハングル）の書籍を発行するように命じました。しかしながら、このように中国あるいは韓国で大きな努力が払われたにもかかわらず、教育制度の転換という面では成功に至りませんでした。つまり、教育制度が非常なエリートに支配されるものであり、比較的限られた教育課程の科目だけが取り扱われたこと、官吏の登用試験に非常に密接なつながりを持っていたこと、こういった面を変えることはできませんでした。

学者の中には、こういった前近代の中国において識字率が低かったこと、教育程度が低かったことを、士大夫と呼ばれる儒者たちとの関連で考える方もおられます。つまり、士大夫階層が非常に排他的なエリート主義を持っていたことが原因であると考えられるわけです。一つの階層が特権を持って専門的な古典用語を独占する傾向があったために、中国では識字率が低かったというふうに考える学者もいるわけです。しかし、もしこれが本当であったとしたら、儒学継承者たる朱熹の考え方というのが理解されていたことにはなりません。朱熹の目的を理解して、普遍的な学校制度を庶民に広げようというふうな考え方は常になされていきましたけれども、朱熹のすすめるような制度というのは成功に至ってはおりませんでした。

ですから、前近代の中国において非常に教育制度が限られていた原因は、決して新儒教主義者たちが、エリート主義者であって、支配者が独占していたからではありません。それ以外のところに、その原因があると思います。つまり、帝政時代の中国においては、この教育制度というのが、官僚行政による官吏の選考試験と強いかかわりを持ち過

ぎていたこと、制度的・行政的な問題の方が、むしろ大きかったと私は考えます。また韓国のケースですけれども、この中国の官吏登用試験をまねた制度がありまして、また「両班」という特権階級がありましたけれども、これが教育の普及を妨げた大きな原因であると私は考えます。

ところが、江戸時代の日本においては、このような官僚制度・官吏登用制度が教育に大きな影響を与えるということはありませんでした。むしろ、貝原益軒とか、あるいはその他の比較的身分の低い儒学者たちの努力によって、地元レベルで個人のイニシアチブによって、広く教育が普及していったわけです。

四

もう一つ是非とも付け加えたいことですけれども、例えば、貝原益軒がその著作を著したのは儒教的な倫理を普及することが目的であつたわけですから、その読者としての対象は様々な社会的階層の人々を念頭に置いておりました。つまり、社会的な適応を図り役割分担をすすめる上でも、女性・子供・侍、その他、様々な階層の人々にこの儒教倫理をすすめることを目的としていたわけです。そこで、学者の中には、この新儒教が急速に普及した鍵は江戸時代の日本にこういふ動向があつたからである、と断言する方もおりますけれども、そう言ってもよいかと思われ

ます。

私にとってより確信を持つ考えは、貝原益軒の著作全体を通じて言えることですが、益軒は決して社会の階層分化を進めていた、強調していたわけではないということです。むしろ、朱子学の教えの普遍的な側面を強調してました。ですから、人間というものが自然の秩序に基づいてその本性を發揮することを強く望んでいたわけです。

『大和俗訓』という貝原益軒の著作に明らかに意図されているのは、全ての日本人のための普遍的な教育、徳育であります。これを普通の言葉で一般の人々に広めようとしています。彼が繰り返し強調していることですけれども、全ての人々が自己の涵養を図るべきだ、人間性の修養を図るべきだ、その普遍的方法を求めべきだと言っています。ですから、そのためには、エリート主義・専門主義を放棄すること、人々が人道を極めること、それから全ての

人々に教育が必要であり教育に対する欲求があるのだ、ということを強調していました。それから、貧しい人も障害者も身分の低い人も、その違いにかかわらず、全ての人々にとって学ぶことは共通の目的であると言っています。さらに、こういった共通の目的といいますのは、武士道や、あるいは文人の専門的な芸術性より、はるかに基本的な人間にとって共通の徳性であると訴えていたわけです。

このまさに基本的な人道的・普遍的なメッセージこそが、貝原益軒が日本人に与えた大きな貢献であると思います。長期的にみた教育の発展、日本の近代化にもたらした益軒の大いなる貢献ですが、これは朱子学そのものから生まれ、日本語・日本文化に適應されたものです。これがあつたからこそ、日本人が近代そして自由な社会、いわゆる民主的な時代に立ち向かう準備ができたわけです。ですから、明治維新の時期に、日本人がそれ以前の古い身分制度を捨てて、人類平等主義、あるいは実力主義に基づいて社会を構築していこうと決めた時に、すでに教育を受けていた当時の日本人たちは、その準備ができていたわけです。そして、その礎となつたのが新儒教主義であります。それがあつたために、その後の中国の変革期に起きたような暴力による階級闘争が行われるということもなく、日本の場合は、変革がスムーズに進んだわけです。

日本人の学者で丸山真男という方が、公の場で、儒者荻生徂徠の近代的思想性というものを指摘しております。彼によりますと、荻生徂徠は非常に普遍的な徳性、あるいは全ての人が聖人性を持つというような考え方を捨てて、むしろ職業の専門分化による徹底した個人主義を導入しようとした人だというふうにされております。ですから、人間の本来持っている本質的な自立性、本性によるよりもむしろ職業による専門性によって、個人主義をもたらした人とされております。しかし、私自身はこういった見方とは違う見方を持っております。私の考えによりますと、荻生徂徠は非常に個人の尊厳を軽んじた人ではないかと思ひます。ですから、人間を非常に機械的な、実用的な職務機能を持つという面から捉えておきまして、個人が自立性を持っているということをあまり考えませんでした。そして一般の人達は、例えば荻生徂徠のような専門家、高い権威を持っている人達に従うべきだ、という考え方をした人だと私には思えます。ところが、貝原益軒の方は逆に、人間の全人格的な徳性・価値というものを認めた人として、それは一人一人が自己の涵養を普遍的な教育の中で図っていく中から生まれてくると考えた人であつたわけです。

残念なことに、今の現代社会を見ておきますと、かつて获生徂徠が予期したような専門分化に基づいたような社会の道を歩んでいるように思います。しかしながら、こういうふう近代社会に生きる私達一般市民にとっては、完全な自己実現というのは難しいかもしれませんが、それこそがまさに現代の国際社会、求められているところの地球規模の国際社会において、より多くの情報を持ち責任を担った市民として生きる道ではないかと私は思います。

このような考え方から見えてきますと、貝原益軒は今だに現代人にとって、日本人のみならず世界の人々にとって、導き手となる賢人ではないかと思われます。現代の教育制度を変える上での導き手となるわけです。現代では、個人は非常に無責任になってきました。それから、集団規模で人々が怠慢になってきております。ですから、人間の社会ではますます腐敗が進んできておりますし、自然環境には取り返しのつかないような害を与えています。こういうった結果をもたらした教育制度を変える上での導き手が益軒だと思っております。実際に、今こそ益軒が求めたところの基本的な生命の尊重、天地人一体の考え方に戻るべき時だと思っております。それこそ、人間が生まれながらに持っている価値、一人一人の自己の尊厳に基づいた、朱熹が言うところの一人一人が責任を持って人道を極める道に戻る時だと思っております。こう申しますと、非常に古めかしい言い方に聞こえるかもしれませんが、これは決して時代遅れでも間違いいでもない本当の考え方だと私は思います。

終わりになりましたが、このような素晴らしい機会を私に与えてくださいました福岡市民の皆様、岡田先生に感謝を申し上げます。日本の福岡が生んだ偉大な儒学者貝原益軒の業績の重要性について、はからずもお話をする機会をいただきましたことを心から感謝いたします。どうも、ご静聴ありがとうございました。